西洋道中膝栗毛 十二編 上

ヘ14
1260
23

へ 184
1260

西洋膝栗毛次編依頼之記

野蕃未開の彌次郎者多八維新作の初編始めふ飛御船於艫に属き。洋行丹私足踏の者。航海進之開

化の域ふ。着きんかをきる十二
編。元来作者を不知案内。
浮雲瀬戸を越へんより。此
邊で船を乗換させんと。亜
欧の境を區分まて。地理

ふ明るき寛船生を。頼むて
太平海上無事ふ。米国
までも京切らきんと。虞ふ不
俗ご水母も蝦夷。第笈閑
和。船客を。伝頼の一札後述の

為ゝ杜撰の證出件の如し

紀元二千五百三十四年第一月

横濱櫻木町七丁目第十二號地

神奈垣魯文

總生寛厚

西洋道中膝栗毛十二編自序

放蕩同盟假名垣兄尊瓢屢空らずして立志て
陳蔡の厄を免れんと書肆と協議ひ子貢
が貨殖に従事て此書を戯作しふ不圖か
く時好ふ適ひ甲乙丙丁ゞ底止かく遂續
て十一編此是去歳の春正月也爾來官途
ふ出身て生計畧定機會とかり痼疾ゞ復

發し促之迫之為不聞抱擲なほしの波及
失所措ふ書賈翁ようり反責我さ所由來ゑ
假名垣與余同是人間の廢棄物同氣故ふ
同功純不能為ゑふ所ゑ生人ゑ連坐られ
海ゑ允當以屠牛一鼎相喫而後ゑ雇車夫
北方へ行て疾走下車地ゑ花街柳陌徘徊悅
目夜到二時乃擊柝兀々斷腸とゑ投寢
の今夜苦壓卧ふ徹曉ゑハ陋巷の下等樓
ゑ管仲鮑叔何如我秒時十錢乞哀一小白
垂憐沐浴喫煙ゑ不勝數於今猶窮乏我薄
命諒察て十二編續撰をバ代勞さゑ因故
ゑ如斯ふ御座候以上

紀元二千五百三十三年九月

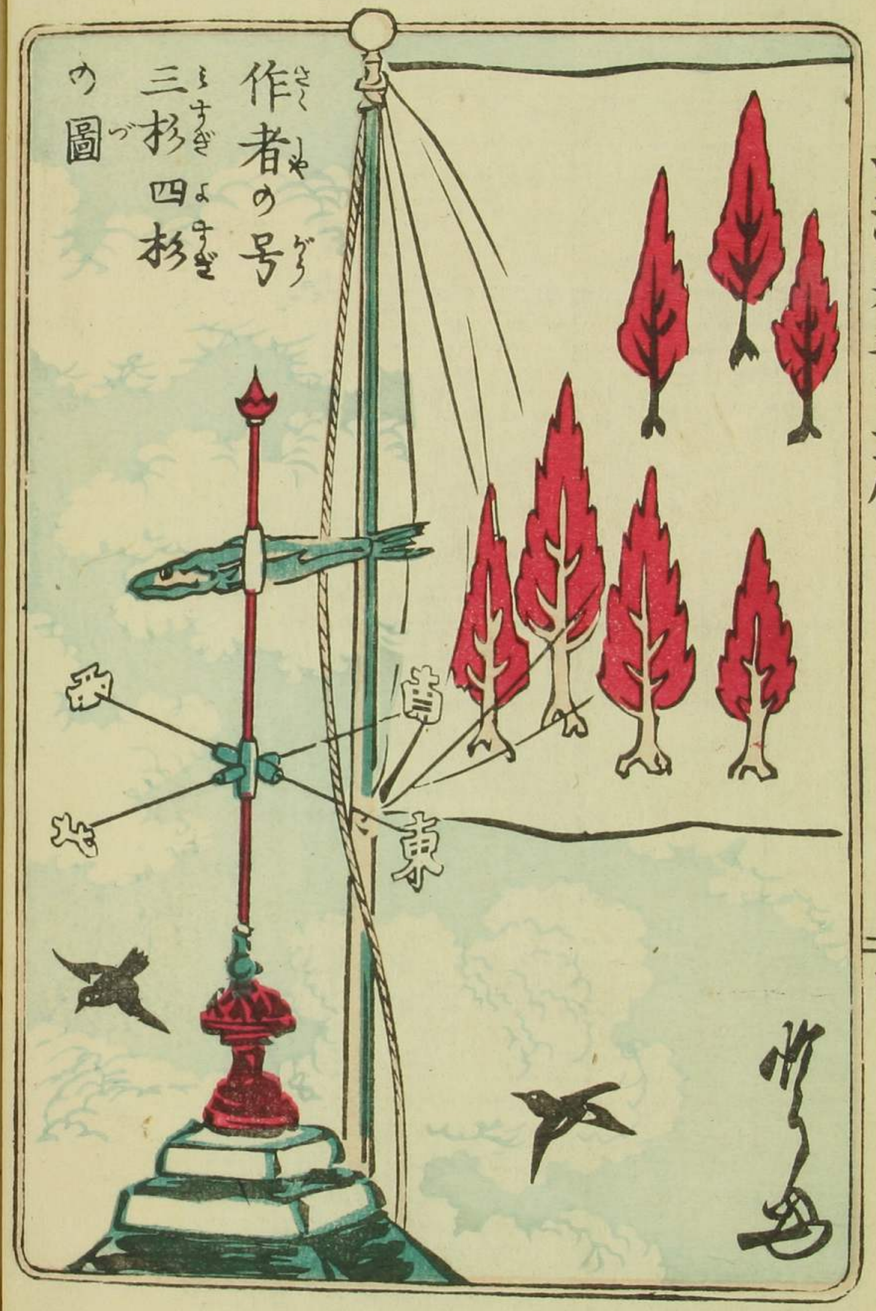
七杉子　總生寛

開化の人

半開の人
赤開の人
暁斎

十洲三島說秦
皇笑教長生不
死方囊裏有錢
樽有酒人間到
處是仙鄉

桂洲生寫



作者の号
三杉四杉
の圖

西洋道中膝栗毛十三編上

假名垣魯文原作
七杉子總生寛續編

扨も泳次郎が八通次郎等の同社に九国湾ふく珊瑚樹の殖産開発ひ辺をしーとて我慶遠の説法さまざま初めて惜りけよ〻拍洲をざるとて容易ふ出〻よそ〻ものと紅中面目あげふ平生人よりさるふ物るも殺りなく口功者ふ云ふせども生好ぐのぶ洞法

況て今度の英船ハ若干の金も費せーとゐるべ
き有遊巡のごとく居ろうろ丸ち傳紙を松せーより
日和もよく波風も穏ろあれバ私ハ蒸気のいたるひふ
ようて去年付るごとく瞬息ゐふ数百里とまだて忽ち
シブラルタルノ港ヲ出ハ地ハ地中海の入口ゐふ南
附奥吉利の頃ゐるり基場の堅固ゐるハ世界中ゆ
一番とものべき撞ひふして海岸の岩山を切りく砲
門を開ける大砲千挺余も据つけあり南岸ハ亜非利

加の地方ゐるゐ帰ハ昔ち右の基場あり表方のる
まぎ狭きところゐく六七里を過より外を大西洋
海と帰を奥吉利人の地中海ゐく威光を耀ろまハ
この基場とマルタ島の基場と二所ゐく要害の地
を堅めたるゐ中くのるゐて港口の人ごとを恐れ
憚ろざるものゐとろゐ此ハ地中海の港口所ゐを
ば先紅毛船ゐ繋ぎ蒸合の人ごハるを上陸して西く
と見物まるうちゐ港口ハ通ゐ帯の二人ハ丸ち傳の

弟分より濃くして互に額紙あいせ沈殿とーく居てう
しゅう屋敷弟分に成人みもうひ「コウ友君必ゆ人は度の一
条ハ実よ深ぐくと安くとやア珊瑚樹あんぞといふ
ものハ素人ゴ法よ多成出せうとやア稀へ者ろし
き合とうひ分とうひ一點の疵瑾もあーきさう美
人ゴあんゆ偽造をしやア者めとそつく笑うんだゴ
面目もあい法界で扶桑とうふのハ出るとのう「支ゆ
遠人ゆ人我等達ゴ者ゆ糸の真中で生れて初め

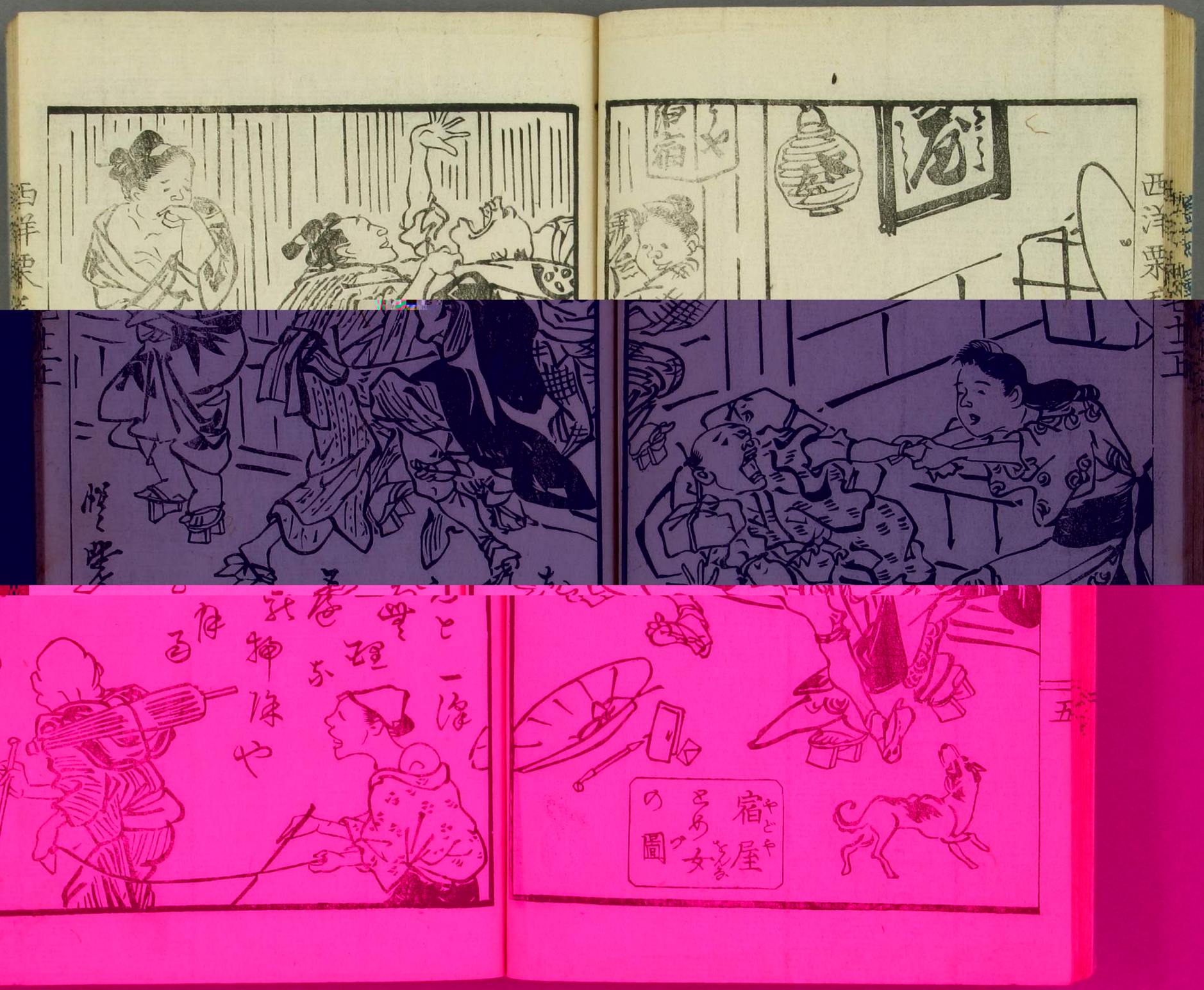
とうゆ人付ろうゆ人の股成ぐりて万人の尾ゆ玉紙撒く
是最所ゴやう海臺ゴ屋ゴ者糸ゴやア五番ゴ横ゆ
招ぎさ　口答赤坂麹町本源川堂寺橋四里四方の輩
中とろゴくも稀来のそうそるのハ稀人とうゆ我等ゴ
仕様をーさのハ所習ゴ多めるうも水ゴのりくんぞアナ
「海様さんゆ人そうやゴ掩飛ぞ拭ゆ考へくさるのハ
四十八位の史消ゴ繰成撫ぎ知く町ゆ明ゴる毛能
ゴ付のゆうゆ了第で者ろとうんる失落ぜ「者

公文分る場合ゑ成いひ申さぜあぜ者のう第で者
ちやういけれ人てこざ「ナニ貴色がかのひ対くいふん
ゑやア稀人ぜ成西洋へ来り申さと生て是ハ申知り
て居る千住の馬場玄まのさんと者系の江口様さ
んと京町よ申漫ろくゆる堅まの先生本ハさんと
三人ガ奥ゆぐ電信機の究理と観物ふ出りみさ吸
りざとりいろ今成賞申さ柳橋ゆへの新光寺
ろろ呼ゆまとーろろ行でも海元ガ来いと言ゆ

ろろゆやア拾ちあるめ人とかの同く戦本のはをひろ
げく申て行くくはると佐ゑ若洋山海紙書拾人達
ゆんだろろ弱学ふ様人ゆんで居く貴色みりゆ
ゆやア者ふ子ふ大達ぐ洋行をするとゆ人と
成申ろガ行りいゆ役利ふ世界ふ同さ上ゆやア
業ドるとゆ稀人拾る者ドガ者ハ海紙書り申
ふ洋ハちやア義者も平生異貴ふかの同く居る
ろ一すあいく行やゆ西洋の物ふを学さと

なるゝ〻ゝなるゝ〻く一称的を成去ようとゝゝく
ゝゝ峰よ巻ッさんぐ〻アぐうの人を細で洋的をき
る命ゝ〻ゝのゝくさんぐとゝゝつゝゝやるゝゝ〻ゝの線でも
産さん横濱の祝ゝさ大後屋の見物ゝ義右利の
博覧会とゝ紙を面ゝとゝゝつゝゝやるゝゝ贊物ゝ附
屬くゝゝうとゝゝひまゝとゝの人ゝ例の西洋
物ぐゝゝを紙掛くゝゝらアまア物ゝゝゝも大業ゝ我
楽も新ゝ人世界ゝのもやア見犯一遍ハ就海つる

りだゝを元のとゝ周循ゝくまゝ去結ゝ人浪ゝも
ゝゝ新人ゝ早速出發る機會ゝるとゝ美談ゝの連ハ
進くぐと安ゝゝゝあの仲るの名をさゝゝゝらアゝ
ゝ色公ゝんぞとゝの周化さ人物もまゝゝく居く
物ゝもあるゝ人ゝ先藤人出る小汐とゝのゝ花御
ゝゝ二星の会紙まくゝ是を使割ゝゝゝ新業を初
めると同ゝるて藤ゝ地理の京況や人気の善悪
までゝさアゝゝさよゝぐるくッちやア見蔵ゝい炎


宿屋
の
圖

端をまるとゞめるもの
人を愚にする何国の
惠とゝ人間法をものゞ
でも隙機度変ゆうの見
冷笑おうゝおもゝさ
たうまゝ年生偏金ふ
を一業を貼とゝ涙じ
る具形見ごろふ泣止さ

さゞ今考ゝくそろとも
物を縛へとおもひ出ゞ
ぶでも一端ハ幼稚なく
さん〳〵そらアおゝ人毎さ
ちやア足ゝ笑ふ拘教ゝ
るんゞ一月そゝ眼ゞ
紙中で返答ゞやアある
生れの人ゞとゝ方

ちゃうくと我業が紙屋人も来るッとさるも
ゆるゝゝ是ゝゝ二人でおしゃんで事情紙屋と仕
ようとやア紙人ゝ　二人ともおゝ続きまう西洋風牛肉その外
色といひ一人の丈いるくのさるを奥人とゆうの紙屋もるよ紙の生
紙屋をよく知りいまゞ系出ゆへ一箇の先生ら
しく学ひまいせどもゆへ知ゆうと豆もあまりのおうゆて独名のゆふを
親族とゆるひるでつけ天寿ゆゝ秘密ゆ医師ゆう
ト墨書ゆうきとしさんとゆもつゆゆるきどうたるふうぞくゆく系
あひの人もおゆゆする人もなくのけものふゆうてをうくいゆをそのあ
ゆ親族をよく平成のそろはゆゆをつくうどーて自然ゆるる人のまゆ
そゆうゆてそのゆくところもまゆんいるちゆひゆくちゆーつけ漢ゆくとゆるゆし
三ト一ヘイ出発ゆさいまし
先生
とゆくゆ参れゆ物ひて西

洋酒系高の酒り紙ゆ〜ゆく
ゆ酒ゆるゆどちゆうとゆくゆとゆもきどちゆくそのちゆ人ゆ
ゆ酒ゆるゆそゆく酒ゆつけをフランケットのよゆテイフルをおき酒を
ゆトゆ一三云云云ゆるゆちゆゆゆゆうきとゆ紙のひゆゆゆ系生の
ゆをゆるとゆゆーくけゆハいゆせる用ゆ毎ゆれバ三人ゆく先生どーゆゆて
ちゆゆゆ人系ゆのうくゆゆ　附ゆ先生　私も物数ゆゆ
ゆる酒ゆ系親族ゆゆむゆひ
撰文の系書へゆ　ゆーたゆう漢ゆの
ちゆうゆゆ酒ゆ　ゆんゆう支那の歴史を漢とゆ二の
ゆゆゆゆゆゆゆゆ　ゆゆゆ巴諸物のゆゆも数ッゆく離紙ゆ
ゆる人ゆやアゆびやせん　先生　実ゆ西洋さん漢ゆ

ぶ
海
ゟ出来ぬくさとて西洋各國の大難ゞよく理会まを
茶飯事さん表多八さん開化進歩の四方よやみ
ゟ書くく一番天地開闢来今日ゟ五ヶ世界
の國の沿革とおそるべきもの政治のうるや
ゟ機の製造ゟ学問ゟ今のごとく尽く文明ゟ
をうさのふるく一朝一夕のるすごんぢやうません
の形ちゟみやゝ物成者ゟ吟くるすへきもの
ゟ成るとゟ初ゟ彩と造ゟとゟ極致と
格
海
ゟ開く歌舞を生業ゟ
ゟ暴を引ぞくおとゟ人性ゟきゟうへくそろ
ゟ方ゟ修繕ゟ侯都ゟ人物ゟ多く舎歌と一
ゟ所ゟ修く衆業ゟ成ゟ工ゟ知ゟ
ゟを木綿の氏と号ゟ文洋海ゟセミバルベリヤンさ
ゟ迄ゟやゝ和ゟ文物ゟ新人ゟ成ゟ形ゟえ
ゟ地のうゟ生ゟるゟ知ゟ文
ゟ国ゟバゟうゟとゟく紙ゟ祝の

ほんにやアおらの所とハ差別がゝきまつてゐる向きのき
今でも亜拉比亜西比利亜韃靼の中のやうな所ハ古風な
風俗が残つて居り中古聖賢のうちでもまア上
蒙古の辺の極寒ところへ深く入るなら片輪の野蛮
へ行きやア人間裏ドやアあるハなんでも名の下ゝするの
さ　弥次「先生ハ上総の川生れだと聞やアまたあの蛮人
ふも腸胃なんぞといふ所があるハ中もり子　先「ある土地とも
く是ハ牛といふく猪肉屋ふやア二人づゝ出る紙

あ「此く抱ひかく又上総の跳子ゝ
和蘭の字でも八百鍋とへ又跡とが八提げ重とへ
御坐る　弥次「そりやア西洋向ハおま共にさうなもので
牛といふ所もどうしていふけで御らんの名でげまる
これ典故あり牛ハ野獣の化女人ぞう　先「そうでも不
なく何ちか此の坐るけふも田ものなく力量あり不
開て云ふ所のさ　弥次「提重とへあとのといふ理不
中もり子　先「ゆるともくまず猪つねりけれるがあり
猪屋などふ酒宴

無烏化
七相子

亞拉比亞人
帳幕の圖
惟光秀

宿のあるじ亭主紙捻て燈火のと寄ふゆたぐ
遠入あんで御添御紙よ寄あらう喝ひえどあと
のでぶ傍る一ある程咲くえりやア面白ひげまね
又八云濱とつくのもあ細ぐあり中まろれ一尺七せる
ふ喝ふるとこ土蕃とつくハ俗ぶ平ハ皆まち牛ハ
ふしぶ大和詞あり一紙いろくふ絵うみどしと程
みハ寄穀とのやうふ安ゆれども毛ハ面くのふ蒙
うう絵せねのぶ博く右ふみ通ずれバ非暁とヤス

とハどざうやせん毛八云濱と称するもたのごとく
先ず絵ひうでハ行るもは仕やうとつくを仕可とつく
うりとあるぐ寄ふ向ひく濃ふと仕拵とをあると
ひ云濱くとつくふうとハ紙合縁しく八云濱とヤ
毛あとくはうち出まる毛道祥寄法附金是バ毛ぐのこくも
ある程ちようと安ちやアおうこのやうでげ毛ぐいそれと
初りくそうやア大とうひでげ毛ちくこ寄ふでおいらん
京都で天神大坂で毛夫あんぞとつくのも絵ぐあり

ゆをとろね「人おうく抑吉原でとるるあのうんとゝ
のゝ多くの美婦人がうをゆと男が性雄
しくを殺の閨房ゝ俳ふとゝ義とゝ雄の
方ゝ撰べゆゝ人ゝ推撰とゝ天祢とゝ唐結選ゝも
美人夫上う為つ就塞んどあて考るべしとゝ
く生嬋娟たると人るとゝ有りゝ是ゆ天涯つたる也
如のやうどやとゝ人とゝで吉夏とゆをハ今とちづゝく
ちゝ白物ゝみどゝいひ就為ゝ紙ゝ媚を求もる

ものゝ考ゝ吉原賣人のゆて拝びゝるゆゝゝ性紙つ
けくゝ性の法夏ゝ推ずるので清元常磐津義
夏みどの法芸人を夏とゆをゆゝ為でどゝる
「ゝる程先生の博識ゝゝ知れゝ入りまゝる」「まづ世
界のゝゝハ下博ゝ蹴ゝる紙弟一の和紙とゝゝれま
ゝる「そとで一首出来ゝる」

文明も野蛮もゝるゝゝ点の名
達人一家ゝ敷澤いゝ

「扨西洋の物産ゆ豪徑へまだ是はさらさら彼
亦開の民たるものも漸くに農業ゆ紙すると紙
堂々たる村落をなし其中へ品物を製作し
高業を営むものも出来て自ら商長の法令を
立て約束ゆ立さだめ人ども秩禄の風俗ゆ
新義を起し資財人畜紙掠めとりたり殺して
ゞその後農工商の業とゆ次に藝道や文字を
講習し他国と交易をなどゆ品物を製し土産を

出し禮義をおのんぞる風ゆなれども我邦紙ゆ
人の見をとり仮今の支那比耳西亜土耳其ゆ拾
ふありたの紙米開の民とゆひ洋語よハースシフイラ
イスドと唱へ文学農商工の業盛ゆ学問
法芸紙研き人情ゆ虚偽少なくして法令を明白
ゆし刑罰寛大と考ぶへ南今の文明開化ゆして
洋語よインライテンドと中ます 考て是りゆ西
洋ごとのものも皆倫例ぐたどめつつ頑愚ゆ

彩人といへ深くもいはやせんず一丈ふしくも今
度のやうを換慢成かくといへとも高のあるも知ら
れぬ紙のあげくるをさん「さまべ先生是
ゝ我業も就動人ひきやア只こ物をうまして始る
ゲ紙でもありやせんゝ有るを高法ふ有るそうな
ものがあれゝ拡出そうとおもへく居るんでまだ
西洋人の高法成る用納をたゆく悟りやうを
ひ発人やせんゝ子先「ゝ見ふこそお給ーけりけシブ

ラルタの瀬戸ハ南岸ふ亜米利加洲ふ接る幕
場ふく位置のとゝり間狭きところふて僅六七
里たりとの瀬戸ふ水ふ後ある二ふ潮の分れて
どぶる地中海ふこの瀬戸たり一方ひで貯のこ
くるふ瀬戸の外ゝり拍強ふなる迫んで間ゝり
外人流ふ出ずとつへこへ位置ゝません強れども古来
ゝり地中海ふ水の溢れしとのふこともなく西洋人
の流ふへ彩毎日毎夜ふなる迫む水ふ地中海の

あの御仁
きまきハ
まるぬ
ゆ鉢
うつぬ
ハ逸
一字
鯢齋
紀元二千五百三十三年
金銀出入帳
第一月

弥次郎
喜多八
通次郎

喉渇き水を湯水のごとくみありく空中にみ消失せる又其地の風あもるかりて人の見る事
処々方の方へ流れ出せざりとやまたが実
ふしぎ不可成ことであるべし則ち西洋人高法の奥義
を悟る西でござる「ヘイ引」この瀬戸の拵
と悟るこへマアどういへてげせう「先」高法と
やスもものいこの瀬戸のこの瀬のごとく物の
ひいなく利益とそれば深山黄泉んでも

人間生れたものの人ふ渡世とつ
まる金銀の多少も人ぶ多ざうふ
この拵ものいて利徳のみ
行業といて まるふ見く入用
入拵と書くみも物といつ家をかさく
家代 多分 渡せの物も則ち利益徳の瀬
兆を表まるのだ乃ち此の瀬戸の瀬
ぶものの多り人ぶ多ざるとつ

実ハ商法の奥有る成 西洋人ハ理会ハ
ぞざる るぞかしハ理ハ有るハ有ハ有ハ
有ハバ添次第ハ人るとちちちちくちくしてゆうんと
ひ 一 ある程まのハの海のゆうハ入るを入るで出ハる
けるやアマア 上策理屈でまず地の底とでゆく人の
聘ふつる移人で又外の海人海ハ出るゆうハ世るの知
ら移人接紙ーちやアあんハるやアまるハト
いとまられを先生理ろハつうく為の紙ありしハ例の事
ハしまるんとろかとろぞまじをハ出ハうる新とーくろる
四 一 今日ハアハろく四活ーのお紙をーて西洋の事情

ハ余ハどあるくありやーさ西で一首こでつけまを
欲ぞハるくやさう吸ひこむ瀬戸の水
人の知らるの底ハけの 完
知られのあるもいやハる入ま拙の
屋ぞハるとハ瀬戸の大二紙
たたい笑ひふ牛まだれあるハ紙屋みで吸ハる

西洋道中膝栗毛十二編上終

○第十二編ニサウスアンプトンへ到着ス

其の所い世界第一開化の源英吉利

の港ゝ〳〵別段ゝ新発明の面白き物

向を渉猟ゝ入れ来る物ゝ不仕

早く仕損ゝ仕て仕る面白き物ゝ

当時の極板元ゝ頼上ル

作者敬白